

どのようなになったのかを概観している。これに関して少ないながらも、オスマン朝期カイロの参詣書写本を取り上げ、オスマン朝統治以降の見直しをも考察する(付論4)。

ところで本書を読むと、「死者の街」での参詣という慣習化された行動の多様な在り方の詳細な記述があり、次に「死者の街」のワクフ制度、及びカオスとも言えそうな状況を統括する秩序、そして今度は参詣対象がどのように生成するのかを「逸話」や「奇蹟譚」に探り、最後にムスリムとコプト・キリスト教徒とユダヤ教徒の参詣・巡礼から総合的なエジプト「社会史」を構想していると見て取ることができるようにも考えられる。評者のような、いささか専門を異にする者からすると、研究対象の重心が参詣慣行の記述にあるのか、参詣慣行が生成する要因にあるのか、それともそれを取り巻く関連する「社会」にあるか、不分明であるが、おそらくそれら全てを記述する「社会史」なのであろう。すると序章で述べている「歴史人類学」と後に記述される「社会史」との相違が明瞭ではないようにも考えられた。

ところで、本書は、研究対象とする時期の参詣に関する資料が豊富で良質なものだと言うこともできるのかもしれないが、著者は、それを丁寧に読み込み、緻密な分析を行なっている。本書は、他の地域や民族の類似した現象の比較に供することが可能になっていると見て取ることができる。これまでアラブ人の「聖者崇拜」(マグリブ)(注2)や「聖者信仰」(チュニジア)(注3)に関する成果も出ているが、本書はエジプトの当該地域の「歴史人類学」や「社会史」としても、類似した現象の比較対象の一里塚、起点としても読まれてしかるべきものである。本書は当該分野に関する緻密な刺激を与え、今後の研究の進展に寄与することについては言を俟たないであろう。

(注1) 上岡弘二「イランの民間信仰の聖所をめぐって——その理解のための仕分けの試み」(片倉もとこ編)『人々のイスラーム——その学際的研究』日本放送協会、昭和62年、pp.253-289。および佐島隆・斎藤久美子編『聖所と参詣行動』アレヴィー／ベクタシ研究会、2014年。などを参照のこと。

(注2) 私市正年『マグリブ中世社会とイスラーム聖者崇拜』山川出版社、2009年、など。

(注3) 鷹木恵子『北アフリカのイスラーム聖者信仰——チュニジア・セグタ村の歴史民族誌』刀水書房、2000年、など。

(佐島 隆 大阪国際大学国際教養学部教授)

---

## 藤井千晶『東アフリカにおける民衆のイスラームは何を語るか——タリーカとスンナの医学』(MINERVA 人文・社会科学叢書227) ミネルヴァ書房 2018年 xi+255頁

### 【はじめに】

本書は、ザンジバルを中心的な調査地とし、現地に生きる「人々の間で育まれてきた豊かなイスラーム実践」(p.16)<sup>1)</sup>の一例としてのタリーカとスンナの医学に焦点を定め、それらの実態を多角的に明らかにした一書である。

本書の特筆すべき功績は、現地調査に基づくスンナの医学に関わる詳細な一次資料とそれらを基にした議論(後述)を提示したことにある。本書全体の三分の一に相当する分量がスンナの医学に関わる第III部に割かれている。そこで提示された資料は、ザンジバルにおける「イスラーム実践」の基礎的資料として貴重なものであり、今後のザンジバル、東アフリカ沿岸部におけるイスラームを対象とした研究のみならず、本書と同様に預言者の医学や「民衆のイスラーム」に関わる研究の発展に資するものである。地道な調査によって得られた豊富な情報を研究成果としたまとめたことの意義は大きいものである。

さらに、本書は以下のような特色も有している。第一に、本書は、アフリカ大陸のタンザニアやケニアのみならず、アラビア半島などを含めた地域との広範な歴史的・地域的連関を視野に収めつつ、ザンジバルにおける「イスラーム実践」の詳細を明らかにしている。

第二に、本書は、参与観察に基づく一次資料とあわせて、スンナの医学に関わる現地の治療者たちが作成したスワヒリ語およびアラビア語の文献資料を対象としている。現地調査、原典研究の双方に目配りをして

---

1) 書評対象である藤井氏の著書からの典拠についてはページ数のみを記載する。

まとめられた本書は、イスラーム研究、歴史学、さらには人類学などを架橋する試みともいえ、東アフリカ海域におけるイスラームを主題とした研究のさらなる発展に寄与するものといえよう。

ところで、サハラ砂漠以南アフリカにおけるイスラームを対象とした日本国内における研究の進展は、近年若手研究者を中心として目覚ましい。西アフリカを対象とした人類学的イスラーム研究では、「西スーダン」のイスラーム化を扱った坂井信三氏の下で研鑽を積んだ中尾世治氏や、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科に在籍中の池邊智基氏、平山草太氏など若手研究者の進展が見られる<sup>2)</sup>。これに対して藤井氏は、同じくザンジバルをフィールドとする朝田郁氏(京都大学アフリカ地域研究資料センター)と並んで東アフリカ沿岸部を対象とした、将来が囑望される貴重な若手研究者の一人である。

### 【構成と内容】

本書は、2006年に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に提出された博士予備論文(修士論文に相当)と、2010年に同研究科に提出された博士論文を大幅に加筆・修正したものであり(pp. 249–250)、全13章のうち、5章分にあたる序章、1章、2章、6章、終章が今回新たに執筆されている。全体の構成は以下のようなものである。

- 序章 多様な民衆のイスラームへのいざない
- 第I部 東アフリカにおける民衆のイスラームへの視座
  - 第1章 民衆のイスラーム
  - 第2章 東アフリカ沿岸部の概要
- 第II部 東アフリカにおけるタリーカ
  - 第3章 東アフリカのタリーカ
  - 第4章 タリーカと預言者生誕祭
  - 第5章 ザンジバルにおけるタリーカをめぐる状況
- 第III部 東アフリカにおけるスナナの医学
  - 第6章 預言者の医学
  - 第7章 「イスラーム的」医療と精霊の関わり
  - 第8章 ウガンガとスナナの医学の比較
  - 第9章 スナナの医学の実践
- 第IV部 東アフリカにおける民衆のイスラーム
  - 第10章 イスラームの知の変遷
  - 第11章 伝統と改革のはざま
- 終章 移り変わる民衆のイスラーム

本書は、序章と終章も含めると13章と多数の章から構成されている。またそこで取り上げられている論点や議論も多岐にわたるものである。そのため論点を可能な限り取りこぼさないようにするために各章の内容をやや詳しく取り上げたい。

序章「多様な民衆のイスラームへのいざない」では本書の目的が明示される。それは、「タリーカ(イスラーム神秘主義教団)とスナナの医学(預言者ムハンマドの言行に基づく医学)の実践をとおして、東アフリカにおける民衆のイスラームを考察することである」(p.1)。

第I部「東アフリカにおける民衆のイスラームへの視座」は2章から構成されている。第1章「民衆のイ

2) 中尾世治氏が企画者となり、2019年1月26日に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所において開催されたフィールドネット・ラウンジ企画セミナー「西アフリカ・イスラーム研究の新展開」は、日本国内における西アフリカにおけるイスラームを対象とした若手研究者の進展を示すものであった。同企画の成果報告書はインターネット上で公開されている[中尾2019]。そのほか、『年報人類学研究』20号(2020年6月刊行予定)誌上における「特集 西アフリカ・イスラーム研究の新展開——坂井信三先生退職記念」が企画されている。

スラーム」では、既存の「民衆イスラーム」研究、中でもとくに東アフリカを対象とした「民衆イスラーム」研究に伏在していた問題点に対する批判が明確に提示されている。その問題点とは「民衆イスラーム」が「正統な」「公式の」「規範的」イスラームの対極にある、「劣った」ものという印象を読者に与えかねないことにある (p.14)。このような含意をもつ「民衆イスラーム」に代えて、「民衆を主役としたイスラーム像を描くこと」を目指した本書では「民衆のイスラーム」という表記を通じて「人々の日常のイスラーム実践」を捉えていこうとする (p.14)。

東アフリカにおけるイスラームを論ずる既存の研究の問題点としては、「周縁」や「田舎イスラーム」と捉えられてきたことや、「7世紀にはすでに東アフリカに伝わっていたイスラームを、「土着」ではない外来の要素とみなす点」が挙げられる (p.15)。既存の研究に伏在するこれらの問題点を踏まえて藤井氏は、東アフリカを対象とした先行研究においても「民衆のイスラームは重視されず、常に迷信や土着的要素と混交したもので、二次的なものにとらえられてきた」と指摘する (p.16)。その結果、「民衆のイスラームは軽視され、人々の間で育まれてきた豊かなイスラーム実践は、研究対象としては除外されたり見落とされたりしてきたのである」 (p.16) と主張する。これらの一連の指摘、問題意識は重要なものであり、評者はこのような藤井氏の問題意識に共感するものである。

第2章「東アフリカ沿岸部の概要」では、「東アフリカは、慣例としてはケニア、タンザニア、ウガンダの3国をさす」 (p.19) という定義が提示された後に、本書が対象とする地域とアラビア半島やインドなどとの繋がり (第1節)、著者が言う「東アフリカ」とザンジバルを含む島嶼部の地理的特徴 (第2節) に簡潔に触れたうえで、第3節「ザンジバルの盛衰」において8世紀以降、2010年に至るまでの歴史的概要が示されている。とくに詳細に取り上げられるのは、独立後の状況である。第4節では、イギリス統治以降の民族構成について大別するとアフリカ人、インド人、アラブ人についてその歴史的展開も含めて基礎的情報が提示される。

第II部「東アフリカにおけるタリーカ」では、表題の通りタリーカが主題となる。本書においてタリーカを取り上げるのは、「タリーカが19世紀後半以降、東アフリカの民衆へのイスラームの普及に、大きな役割を果たしたため」である (p.2)。同時にそれだけの重要性を有しているのにも関わらず、ザンジバルにおけるタリーカを取り上げた「詳細な研究」は、「最新のものでも1980年」に留まるという点が指摘されている。

以上のような問題意識に基づき、第3章「東アフリカのタリーカ」において、先行研究におけるタリーカに関する記述と現地調査から明らかになったザンジバルにおけるタリーカを網羅的にとりまとめて紹介している。なお、章タイトル、節タイトルには「東アフリカ」と銘打たれているが、ここで取り上げられているのはタンザニア、ザンジバルを中心とした事例であり、ウガンダ、ケニアなどの分布状況は、さほど取り上げられていない。

第4章「タリーカと預言者生誕祭」は、写真などの図版を除くと本文がおおよそ8ページほどの分量と小ぶりなものである。そこでは、著者が現地調査を実施した三つの預言者生誕祭 (マウリデイ) がどのようなものであったのか、主に観察に依拠して概要が示されている。続く第5章「ザンジバルにおけるタリーカをめぐる状況」も10ページほどと章としては小ぶりであるが、通常スーフィーが重んじるスィルスィラが欠如していたり、指導者の名を冠しないタリーカが存在に着目し、それらの教団の成立をザンジバル革命後の社会的・政治的变化に位置づけて論じている。

第III部は、「スンナの医学」が中心的な主題となる。全部で228ページある本論のうちのほぼ半分に相当する110ページほどがあらわれていることから、第III部が、本書の中核をなす部であることが分かる。その冒頭を飾る第6章「預言者の医学」では、預言者の医学の内容を紹介したうえで、預言者の医学の歴史的展開、そして著作が書かれた理由が取り扱われている。なお、第1節は主にイブン・カイイム・ジャウズィーヤの英訳書に、第2節は主に Perho (1995) の研究書に依拠している。

第7章「イスラーム的」医療と精霊の関わり」は、先行研究における「イスラーム的」医療の位置づけを扱った第1節、ザンジバルにおける中国系、韓国系、キリスト教系の医療も含めた様々な医療を網羅的にまとめた第2節、精霊をとりあげた第3節からなる。第7章、第8章は第III部の中でも資料的な厚みがある

ほか、多角的な議論が展開されているので、その内容を少し詳しく紹介したい。

第7章第1節では、海洋帝国オマーンの王族であり、後にドイツ人商人と結婚して改名したエミリー・リュエテ (Emilie Ruete, 藤井氏の表記ではルート)、ザンジバル地区次官であったイギリス人イングラムス、イスラーム研究者として高名なトリミンガム、東アフリカを対象とした人類学的イスラーム研究に従事しているキム、歴史学者ポーウェルズの議論をとりあげている。藤井氏が問題点としているのは、「イスラーム的要素を含む治療儀礼は、先行研究ではアフリカの要素が混淆したのものとしてとらえられてきた」ことと (p. 119)、「未開地域の知識」(p. 119)とみなされてきたことである。そのような理解に対して、19世紀のアラビア語の書籍を調査対象としたデクリッチとロイマイヤーの研究が批判を提起していることに言及し、自身の批判をそれに重ね合わせている。

続く第2節「ザンジバルにおける医療の類型」では、西洋医学、中国・韓国系の医学、在来の医学、アーユルヴェーダ、ウガンガ、スンナの医学、キリスト教の治療儀礼、祖霊による治療儀礼、ンゴマの治療儀礼、家庭の医学を取り上げて、それぞれの治療の内容を紹介している。第8章以降本書の議論はこれらの中でもウガンガとスンナの医学の比較と、スンナの医学の特質の解明にあてられていく。それに先立ってザンジバルにおける多様な治療方法を網羅的に取り上げていることは、人々の日常生活におけるウガンガとスンナの位置づけを見定めるうえでの重要な資料提示であるといえる。だがその一方で提示された資料は簡潔なものに留まっている。加えて、これらの資料提示においては、特定の被治療者の具体的な日常生活の中でどのようにしてこの多様な治療法が実際に活用されているのかが明らかにされている訳ではないし、多様な治療法を羅列した後に、全体を取りまとめる議論が提示されている訳でもなく、あくまでも資料提示に留まってしまう。こうした点を踏まえると、ここで取り上げられた多様な治療は、一般化された全体的な見取り図として提示されたものといえよう。

第3節「精霊の存在」は2ページ強と極めて短いものであるが、そこで身体の不調にしばしば精霊(ジニ)が関与していることが示されている。後続の議論との関係では、「スンナの医学の治療者たちは、患者の抱えている問題の約80～90%がジニに起因し、患者の90%以上が女性であるという」(p. 132)という指摘が重要である。また、ジニを除去する治療に批判的な見解を有していた人が、後にジニの存在を信ずるようになるという話は、人がどのようにしてジニを信じるようになるのかを示す好例の一つである (pp. 132-133)。だが、惜しまれるのはこの例に半ページほどの紙幅しか割かれていないことである。そのため、十分な資料提示と議論の展開がされない、あくまでも簡単な事例紹介に留まってしまう。

第8章「ウガンガとスンナの医学の比較」では、ウガンガとスンナの医学の比較が行われる。第1節「典拠となる著作」では、ウガンガに関するスワヒリ語の書籍が不在であることを指摘し、もっぱら「秘儀的」(p. 136)に親子、師弟の間でウガンガに関する知識が伝承されていくことが、スンナの医学との対比で明らかにされる。スンナの医学においては一般向けのスワヒリ語の書籍が多数出版されており、スンナの医学に関わる知識が、平信徒に開放されたものであることが明示されている (pp. 135-136)。

また、この第1節では、サイディ・ムサという人物が著した著作を取り上げて紹介している。サイディ・ムサについては「第10章3節で詳述」という断り書きが括弧で括られて示されるだけで、どのような経歴、位置づけの人物であるのかという情報はこの段階では示されていない。だが、第10章と第11章の議論からするならば、ザンジバルにおけるスンナの医学の普及においてサイディ・ムサが果たした役割は看過することのできないものである。たとえば、11章において藤井氏は以下のように書き記している (p. 214)。

スンナの医学が盛んに実践されるようになったのは、東アフリカにおいてアンサール・スンナの担い手が活躍し始めた時期とも一致する。1980年代にサイディ・ムサが祈禱による治療に関する書籍を出版したことを皮切りに、クルアーンとハディースに依拠するスンナの医学の書籍が、多数出版されるようになった。

このような重要な情報提示が第7章の段階でなされていないのは、第7章においては出版物に焦点を定めようとしたからであろうと推測する。しかしながら、その書籍の普及という現象が持つ意味や背景を読者が理解するためには、あらかじめアンサール・スンナとサイディ・ムサの関連にも触れておくべきであった。

第2節では、ウガンガとスンナの医学の治療手段が比較される。藤井氏がとくに注目しているのが、スンナの医学においては治癒目的のクルアーン朗誦に際してスピーカーが用いられる点である。スピーカーは患部などにあてられることがあるほか、大音量で部屋にいる人々に聞こえるような音量で朗誦を行うために用いられたりするが、これはウガンガには見られない特徴であるという。

第3節では、治療において用いられる香油、香、クルアーンが朗誦された水、葉草類、魔方陣、コンベ、サダカ、カファラなどについて、それらの材質や使用法が網羅的に示される。第4節では、ウガンガとスンナの医学の異同を明らかにすることに主眼が注がれる。共通点は、「双方が預言者の医学を基礎としていること」(p.152)である。他方、相違点については、スンナの医学では「預言者は実践しなかったと治療者が判断したりする要素を排除している」ことが挙げられ、「現在のスンナの医学は、治療者がクルアーンとハディースに基づいてウガンガの内容を精査し、取捨選択した治療方法なのである」という見解が提示される(p.153)。

第9章「スンナの医学の実践」は33ページほどからなる章で、その分量からみて本書の中でもっとも厚みがあるだけでなく、一次資料の提示という面からみても、もっとも詳細なものである。こうした点から、タリーカとスンナの医学を扱った本書の中でも核をなす一章であると位置づけられよう。

その第1節「情報媒体」では、スンナの医学に関わる知識を伝達する媒体として、書店、葉草店、ラジオ放送、モスクやクルアーン学校での授業などが取り上げられる。第2節「治療所と治療者の属性」は、ザンジバルで開設されているスンナの医学の治療所12カ所で行なったインタビューの結果に基づく節であるが、記述の半分はこれらの治療所に関わる先駆者サリフの知的形成や治療活動に関わる内容を扱っている。第3節「治療実践」では、スンナの医学に基づく治療が具体的にどのようなものか、詳細にその様子が記されている。第4節「スンナの医学が対象とする病／問題」は、その内容として「腹の不調」、「夫婦間の問題」、「原因不明の身体の不調」、「家の病」、「不治の病(HIV／エイズ)」に分類してスンナの医学に関わる病が提示される。最後に第5節「病との付き合い」では、精霊との付き合いに焦点を定めた議論が提示されている。全体として振り返るならば、スンナの医学を伝達する媒体(第1節)、治療所の分布(第2節)、スンナの医学に関わる病の種類(第4節)などは、関係する情報を網羅的に取り上げて提示しているのだが、それは第9章以前の章の特徴とも重なるものである。

第IV部「東アフリカにおける民衆のイスラーム」においては、ザンジバルに流入したイスラーム復興の潮流を後づけつつ、スンナの医学がいかんにしてザンジバルに普及したのかを明らかにしている。なお、第10章と第11章の初出はともに『日本中東学会年報』に2012年に掲載された英語論文である[Fujii 2012]。

第10章「イスラームの知の変遷」では、アラビア半島との密接な結びつきを歴史的に有してきたザンジバルにおけるハドラマウト出身者によるイスラーム改革の動きを、預言者生誕祭、教育改革、スワヒリ語を活用したイスラーム的知識の普及などに着目して明らかにしてゆく。

第11章「伝統と改革のはざままで」は、第III部以降の主題であるウガンガとスンナの医学の差異が生み出された歴史的背景にアンサール・スンナの担い手たちの活動があることを示している。「アンサール・スンナの担い手は、「迷信である」と判断するウガンガの内容を改革し、それに代わるものとしてスンナの医学を実践し始めた」のである(p.214)。

終章では、これまでの議論をまとめた上で第2節「これからの民衆のイスラームの地平」において、藤井氏の今後の研究展開の見通しが描かれている。その内容は、(1)政治運動との結びつき、(2)女性たちの抱える問題、(3)場所・環境・振る舞い・言葉・モノの持つ「聖なる力」の考察、(4)他のイスラーム世界との比較である。

#### 【本書の意義とさらなる展開に向けた論点】

以上が各章の概要である。本書は全体で13章と多数の章から成り立っているが、全体は理論的視座と歴史的背景や地理的概況を扱った第I部、タリーカを扱った第II部、スンナの医学に関わる第III部、そして改革思想の流入とそれに伴う宗教的変化を扱った第IV部の4部で構成されており、章構成は明確に構造化

されている。

本書では、ザンジバルに存在するタリーカの一覧、多様な治療方法の一覧、ウガンガやスナナの医学で用いられるモノの一覧、スナナの医学に関わる知識や情報伝達の媒体などについて網羅的に資料を収集し、体系的に提示しようとするという姿勢が一貫して認められる。そうした研究姿勢は、ザンジバルを中心とした地域における「スナナの医学」および「イスラーム的医療」の実態に関する情報の豊富な提示に結実している。加えて、ザンジバルにおけるスナナの医学を論じるうえで、一方では、東アフリカ沿岸部のみならず、ハドラマウト、オマーンなどアラビア半島との歴史的関係を視野に収め、他方ではイギリスによる植民地支配から独立以降の歴史への目配りがなされている。

このような研究の特質のゆえに本書は、今後のザンジバルやタンザニアなどをはじめとした「東アフリカ」における預言者の医学をはじめとした治療に関わる研究のみならず、他地域においても同様の研究関心を有した者に貴重な貢献をなしているといえよう。同時に本書の資料は2007年時点でのザンジバルにおけるスナナの医学、ウガンガなどに関する歴史的記録としても価値のあるものである。

次に、本書のさらなる展開を見据えたときに論点となるであろうと評者が考えることと疑問点を挙げておく。取り上げるのは、(1) アンサール・スナナの扱い、(2) タリーカ、(3) 預言者の医学、(4) ウガンガを簡素化したものとしてのスナナの医学、(5) 民衆のイスラーム、(6) その他である。

#### (1) アンサール・スナナの扱い

アンサール・スナナについては主に第IV部で取り上げられている。このことは構成と内容の双方において、以下に記すような問題点をもたらしていると評者は考える。

まず全体の構成を振り返ると、第I部においてザンジバルを中心とした地域の歴史概要を扱った後に、第III部で2000年代のスナナの医学の現状を扱ってから、第IV部に入って再び歴史的展開を扱うという形になっており、やや変則的である。全体の構成や流れを考えた時には、さらに議論を整理する余地があったのではないかと考える。

次に、議論の内容から見ても、第IV部でアンサール・スナナを取り上げたことには疑問が残る。第IV部に関わる問いは「なぜスナナの医学が現在、東アフリカ沿岸部で盛んに実践されているのか」というものである(p.223)。そして、この問いに答えるべくハドラマミー系の宗教知識人とアンサール・スナナの担い手がウガンガを改変してスナナの医学を新たに整えていく過程が第10章と第11章で具体的に描かれている。つまり、第IV部は問いに答えた内容となっており、議論に齟齬はない。

だが、ウガンガとスナナの医学の差異がアンサール・スナナの担い手の主導的な働きによってもたらされたものであるとするならば、ここで提示されたアンサール・スナナに関する議論や情報はもっと早い段階で提示すべきであったのではないだろうか。そうすることで、読者の理解のみならず、本書の立論や議論の展開も全く異なるものとなったのではないかと考える。

たとえば、アンサール・スナナがスナナの医学の普及に果たした役割や活動についてあらかじめ言及することで、ウガンガとスナナの医学の担い手の間でのせめぎ合いや、あるいはウガンガの担い手たちのアンサール・スナナとの関係の具体的な諸相を本書の議論の中心に据えることが可能になったはずである。ところが、議論の前提となるべき情報を本書における議論の最後に持ってきてしまったことで、アンサール・スナナを中核に据えてウガンガとスナナの医学の関係を動的に論じる可能性が削ぎ落とされてしまっている。同時に、第III部におけるウガンガとスナナの医学の異同を論じた議論も、藤井氏の直接観察に基づいたものに限定された「静態的」なものとなってしまっている。著者自身が、アンサール・スナナの歴史的展開が果たした役割を第IV部において明確に提示しているだけに、この点は惜しまれる。

もっとも、アンサール・スナナについて第IV部で取り上げたことには他の理由もあるのかもしれない。たとえば、アンサール・スナナなどをめぐる議論が、タリーカを扱った第II部と、スナナの医学を扱った第III部の後に位置づけられている理由として、アンサール・スナナやハドラマミー系の知識人がタリーカやウガンガなどの「在来」のイスラーム的实践を批判していることが背景にあると推察される。つまり、タリーカとスナナの医学という別個の主題を統合する役割を第IV部は担わされているように見えるのである。だ

が、かりにそうだとすると、本書で取り上げられた「民衆のイスラーム」の一例としてのタリーカとスンナの医学の間には直接的、有機的な議論の関連性が希薄であるということにもなる。だからこそ、両者を関連づける重要な媒介項としてハドラマー系の知識人やアンサール・スンナの担い手たちの「改革」を、第II部と第III部の後に位置づけるような構成になったのではないだろうか。

## (2) タリーカ

上に記したことに関連してタリーカについて少し記しておきたい。本書では第II部でタリーカ、第III部でスンナの医学が主題となっている。この第II部において取り上げられたタリーカおよびマウリディという研究主題は、藤井氏と同じくザンジバルのタリーカを対象とした朝田氏の研究〔朝田2007, 2017〕とかなり重なるものである。だが、本書では、2007年に刊行された朝田氏の論考が参考文献に挙げられていないほか、マウリディを扱った第3章において朝田氏の著書の該当箇所〔朝田2017: 159-181〕も参照されていない。情報量においては朝田氏の研究は本書で提示されたものよりも詳細なところも多々あるのだが、本書ではそれらを参照せず、藤井氏自身の直接観察に基づく記述が中心となっている。しかし、その一次資料はたとえば第III部で提示されたスンナの医学について提示された一次資料と比較しても明らかに簡潔なものにとどまってしまう。さらに、タリーカとスンナの医学は双方とも「民衆のイスラーム」に含まれるものとして本書では提示されているのだが、先に記したように両者を繋ぐ積極的な意義は提示されていない。以上の点を踏まえるならば、本書の価値は、第II部以上に、第III部におけるスンナの医学をめぐる一次資料と議論にあるということになろう。

## (3) 預言者の医学

次に、本書固有の価値があると評者が考えるスンナの医学との関連で、預言者の医学について取り上げたい。預言者の医学は、スンナの医学とウガンガを比較するうえで、両者に影響を及ぼしているものとして位置づけられている。そして、第8章の図8-1(p.152)や第11章では、預言者の医学に属するものとして「コンベ、魔方陣、カファラ」が挙げられている。

だが、実のところ、これらについての説明は預言者の医学を扱った第6章では提示されていない。それらを取り上げられているのは、ウガンガとスンナの医学を扱った第8章においてである。これは、単に説明を付すべき章で説明がされていなかったということに留まらず、預言者の医学に含まれるものとしてコンベ、カファラを捉えるのがそもそも妥当なのかどうかという疑問を生み出す。預言者の医学を提唱した代表的な知識人はイブン・カイイム・ジャウズィーヤなどであるが、果たしてイブン・カイイム・ジャウズィーヤたちがコンベやカファラを預言者の医学に含まれるものとしていたのか、資料に依拠した議論が6章において提示されておくべきであった。

カファラ、コンベが預言者の医学に含まれるか否かという論点が重要なのは、それがウガンガとスンナの異同をめぐる議論とも関連しているからである。本書においては、コンベとカファラは預言者の医学とウガンガに含まれるものであるとする一方で、スンナの医学には含まれないものとされている。だが、コンベやカファラは預言者の医学に含まれるものではなく、東アフリカ沿岸部における地域実践の可能性がないかという点も検討をすべきであったのではないだろうか。

以上のような預言者の医学をめぐる疑問は、以下に記すスンナの医学をめぐる疑問をさらに生み出す。

## (4) ウガンガを簡素化したものとしてのスンナの医学

第III部で取り上げられたスンナの医学とウガンガについて、終章ではスンナの医学がアンサール・スンナの担い手によってウガンガを簡素化されたものであるという理解が提示されている。終章における議論であり、かつ以下に引用するように複数回同様の記述が示されていることから、この理解は結論の一つとして位置づけて良いであろう。

ウガンガとスンナの医学を比較検討した第8章で明らかになったのは、ウガンガが預言者の医学やズィクリ、歌、占いなどと言った様々な要素を含んでいるのに対して、スンナの医学はクルアーンとハ

ディースに立脚し、ウガンガの中でも彼らが非イスラーム的であると判断する要素を削ぎ落とし、ハディースに言及のあるものを新たに取り入れたものであった。アンサール・スンナの担い手は、「迷信である」と判断するウガンガの内容を改革し、それに代わるものとしてスンナの医学を実践し始めたのである。(p.214)

スンナの医学はアンサール・スンナの担い手が、クルアーンとハディースを後ろ盾に、ウガンガを現代の思想潮流や社会のニーズに合うように改革したものなのである。(p.215)

イスラーム復興の潮流の中、1990年代以降、盛んに実践されるようになったスンナの医学は、アンサール・スンナの担い手が主導し、クルアーンとハディースに基づいてウガンガの治療方法を修正・改革することで、人々に広く受け入れられた。

しかしながら、スンナの医学の治療者は、順応したとみられる現在の形にたどり着くまでに、多くの葛藤を抱えていたであろう。(p.224)

ここで評者がまず疑問に思うのは、ウガンガとスンナの医学を比較しつつ議論を進める際に、議論の前提として取り上げられていた「預言者の医学」についての言及が全くなされていないことである。この点と合わせて疑問に思うのは、実は本論においては、アンサール・スンナがウガンガを元にしながらそれを簡素化したということについては議論も、論証もされていないことである。

こうしたことから、そもそもアンサール・スンナの担い手はウガンガを「非イスラーム的」と捉えているのに、なぜわざわざウガンガに依拠しなくてはいけないのかという疑問も湧いてくる。アンサール・スンナの担い手にとってウガンガは改変の対象ではなく、批判対象なのであって、彼らにとって重要だったのはウガンガではなく、むしろ預言者の医学であったとみた方が自然ではないだろうか。アンサール・スンナの重要な担い手であり、かつスンナの医学の普及者の一人として本書で注目されているタンザニア出身のサイディ・ムサも本書の記述からするとウガンガを実践していた訳でもない。

最後に、上に挙げた三つ目の引用文の最後の一文に注目をしておきたい。ここでは「スンナの医学の治療者は、順応したとみられる現在の形にたどり着くまでに、多くの葛藤を抱えていたであろう」と記されていた。だが、実際にはこの「葛藤」は本論にあたる第III部、第IV部では論じられていない。このことは、すでにアンサール・スンナの取り上げ方への疑問を提示した箇所でも評者が記したように、「なぜスンナの医学が現在、東アフリカ沿岸部で盛んに実践されているのか」という問いの設定と、その問いに答えるための議論を第IV部に持ってきてしまったがゆえに、十分に矛盾や葛藤をめぐる資料や議論を提示することができなかったのではないかと推察している。また、「葛藤」ということではいうならば、すでに記したようにアンサール・スンナの影響力が増す中で「非イスラーム的」として批判の対象となっているウガンガの担い手が直面している葛藤をも取り上げるべきであったのではないだろうか。

##### (5) 民衆のイスラーム

これまでのところで指摘してきた問題点は、結果として藤井氏が第1章で提示した「民衆のイスラーム」の捉え方にも関わる疑問を生み出す。藤井氏は、「民衆を主役としたイスラーム像を描くこと」、そして「人々の日常のイスラーム実践」を捉えることを本書の目的に据えていた。同時に、東アフリカを対象とした既存のイスラーム研究の問題点として、東アフリカにおけるイスラームを「周縁性」、外來性、「迷信や土着的要素」との混交性などで特徴づけてきたことを藤井氏は第一章において指摘していた。

ザンジバルに固有の社会的・歴史的環境の中でのタリーカの受容と展開を明らかにした第II部と、スンナの医学とウガンガの比較のみならずザンジバルにおける多様な治療行為を視野に納めた第III部の議論は、こうした目的に合致した内容となっている。

だが、多様な目配りと観察に基づいて豊富な一次資料が提示されてはいるものの、第IV部から終章における議論は、ウガンガの簡素化に伴うスンナの医学の形成とタリーカの受容をめぐる議論に収斂されてしまっている。その結果として、第III部などにおいて提示された「人々の日常のイスラーム実践」の豊かさ

がそぎ落とされた議論になってしまったのではないだろうか。

たとえば、アフリカ系、オマーン系とハドラマウト系に二分されるアラビア半島出身者、インド系など、ザンジバル外から流入した多様な人々の相互交渉の中でウガンガやスナナの医学を論ずるという視点は本書では希薄である。本書ではキリスト教徒や中国人による治療などにも目配りをしてはいたが、それらのマイノリティとの関係についてのウガンガの治療者やアンサール・スナナの担い手の意識や関係がどのようなものであるのかも記されていない。

さらに、祖霊による治療が存在することは記されていたが、祖霊による治療と精霊の治療は個人の中でどのように関係づけられているのか、あるいは関係づけられていないのかといった問いも不問に付されてしまっている。これらの結果として、宗教、宗派、民族構成や多様な治療の存在への言及はあくまでも議論の前提として提示されているのに過ぎず、それらとの関わりの中でウガンガやスナナの医学をめぐる実践がどのような交渉下に置かれているのかという問いは等閑に付されてしまっている。そして、ウガンガとスナナの医学の異同の比較とスナナの医学の普及にのみ最終的に議論が収斂されてしまっている。

あらかじめ提示されていた民族、宗教・宗派、多様な治療の記述が後続の議論で活かされなかったのは、あくまでもスナナの医学とウガンガの対比を中心に立論しようとする著者の問題関心に従って「人々の日常のイスラーム実践」の捉え方が狭められていたからではないだろうか。

#### (6) その他

上に挙げた諸点以外で疑問に感じたことを最後に数点挙げておきたい。

第一に、本書は、民衆イスラームや預言者の医学に関わる先行研究の議論を列挙する形で提示している。だがその一方で、理論面において必ずしも独自の仮説や分析枠組みが提示されているわけではない。筆者の独自の理論提示がなされたならば、本書の議論は学界における議論を活性化させるのに一層資するものとなったと思われる。なお、藤井氏独自の視点として「民衆イスラーム」に代えて「民衆のイスラーム」という捉え方が提示されている。そこでの筆者の問題関心に評者も共感するものであることを重ねて記しておきたい。

第二に、タリーカ、スナナの医学を主に扱った本書では、各章ごとに何を扱うか、何に取り組むかは丁寧かつ明瞭に記されている。そのため、各章の論点は明確に読者に伝わるものとなっている。だが、その一方で、なぜそれを取り上げるのかといった意図や目論見に関する説明は必ずしも十分にはなされていない。たとえば、タリーカのマウリディについては三つの事例が取り上げられているが、なぜ数あるマウリディの中でこの三つが選択をされたのか、その論拠は記されていない。

第三に、本書の各章の要約などにおいても記したように、本書において提示された資料は網羅的なものであることを特色としている。それらは、ザンジバルにおけるスナナの医学やウガンガをめぐる基礎的資料の提示として貴重である。他方で、13章という多数の章で本書が構成されていることにも象徴的に示されるように、本書の論点は多岐に渡っている。その結果、網羅的に収集された資料の提示という貢献が認められる一方で、他方では個々の事例に十分な紙幅を割いた資料提示と分析がなされていないという傾向が看取されるのである。たとえばタリーカのマウリディ、ウガンガやスナナの医学などによる治療について非常に簡潔な事例提示に留まるという傾向がある。タリーカの拠点の分布、ウガンガやスナナの医学の治療者の分布などについての資料が充実する一方で、それらの治療者による治療の詳細についての記述が乏しいのである。こうした点を踏まえると本書は、今後の研究のさらなる展開の礎を提供しているといえる一方で、各章で取り上げられた個別のテーマについてはさらなる議論の深化の余地が多分に残されているといえよう。それは、今後の研究のさらなる発展可能性が大いに残されているということでもある。

第四に、ザンジバルの歴史や多様な民族構成を扱った第2章(第3、4節)や多様な医療の実態をめぐる基礎的な情報が提示された第7章(第2節)など、本書では必ずしもタリーカやスナナの医学をめぐる議論と直接関連しないところにまで目配りをして、ザンジバルやザンジバルにおける治療に関わる情報が提示されている。いずれも貴重な資料提示であるが、それらの情報が後続の議論において積極的に用いられていない点が惜まれる。

第五に、預言者の医学についてはイブン・カイイム・ジャウズィーヤの英訳書と Perho の議論に主に依拠

しているが、預言者の医学は本書の核の一つであるので、イブン・カイム・ジャウズイーヤの原典にあたることができれば一層良かったのではないかと考える。

第六に、評者が気になった用語ないし訳語として「呪術」(p.139)や「魔術」(p.135など)を挙げておきたい。「呪術」については、「ハディースによると預言者ムハンマドが呪術的な効力を有すると信じたとされており」(p.139)という一文で用いられているのだが、イスラーム研究の文脈で言うならば「呪術」はアラビア語の“*sihir*”の訳語である[斎藤 2002: 481]。これは明確に反イスラーム的なものを指すことになるので、預言者ムハンマドに関連する内容で「呪術」という語を用いるのが適切かどうか注意を払うべきであったのではないかと考える。

「魔術」については、たとえばトリミンガムの著作を扱った箇所(p.15)や、アフマド・ブーニーの『諸知識の太陽』(p.135)におけるアラビア語の用語の訳語として記されている。だが、トリミンガム、アフマド・ブーニーの原語は記載されていない。そのため、まず言えるのは、それぞれについて原語を付記しておくべきであったということである。次に、西洋における「魔術」の語義と、アラビア語における原語の語義の異同を検討しつつ、果たして「魔術」という日本語を用いるのが妥当か検討すべきであったのではないだろうか。同様の検討は、本書の中で用いられている「白魔術」(p.15)、「イスラーム魔術」(p.15)などという用語にも当てはまる。

本書は精霊による憑依やそれに関連した治療行為をイスラーム的価値観に基づいて評価するアンサール・スナナの担い手やスナナの医学の治療者たちのことを扱っている。こうした本書の研究主題からみても、「呪術」や「魔術」などの語の使用には慎重になるとともに、あらかじめこれらの用語ないし訳語の選択の理由や根拠を示しておくべきであった。

#### 【おわりに】

以上、これまでのところでは、本書の持つ意義とさらなる展開に向けた論点や留意点、そして疑問点について記してきた。だが、それらの疑問点とは別に、藤井氏がタンザニア本土やアラビア半島などの動向にも目を向けつつ、地道な現地調査を通じてザンジバルにおけるスナナの医学とウガンガの実態を克明に明らかにした功績を、今一度ここで強調しておきたい。

インド洋海域を舞台としたイスラームに関連する研究としては、本書でも取り上げられている家島彦一氏による先駆的かつ独創的な歴史学的研究のほか、歴史学では富永智津子氏や鈴木英明氏による奴隷交易に関する研究、また地域研究においては藤井氏と同じくザンジバルにおけるタリーカ、マウリディ研究から出発し、ハドラミー移民に関心を深めて研究を進めている朝田氏などの研究、人類学では大川真由子氏によるオマーン移民の研究成果が既に出ている。他方で、東アフリカを対象とした文化人類学的研究において憑依は大きな関心を持って研究が蓄積されてきた主題である。一貫してスナナの医学に関心を抱き研究を続けてきた藤井氏の今回の研究成果は、このような東アフリカ、インド洋を舞台としたイスラーム研究、地域研究、歴史学、さらに人類学的研究を今後さらに接合していくうえでも要となる内容を伴ったものであり、藤井氏の今後のさらなる研究の展開が大いに期待される。

#### 謝辞

本稿執筆に際して、大川真由子氏(神奈川大学)から有益なコメントをいただいた。記して謝意を表する。

#### 参考文献

- 朝田郁 2007 「ザンジバルにおけるタリーカの展開」『大阪外大スワヒリ&アフリカ研究』17, pp.29-58.  
 —— 2017 『海をわたるアラブ：東アフリカ・ザンジバルを目指したハドラミー移民の旅』松香堂書店。  
 斎藤美津子 2002 「呪術」大塚和夫ほか(編)『岩波イスラーム辞典』岩波書店, p.481。  
 中尾世治 2019 『西アフリカ・イスラーム研究の新展開 ワークショップ実施報告書』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 2018 年度フィールドネット・ラウンジ企画 ワークショップ)  
 <[http://fieldnet.aa-ken.jp/wp/wp-content/uploads/2019/02/20190126\\_Fieldnet\\_lounge\\_Report.pdf](http://fieldnet.aa-ken.jp/wp/wp-content/uploads/2019/02/20190126_Fieldnet_lounge_Report.pdf)>。  
 Fujii, Chiaki. 2007. “Data on Zawiyas in Contemporary Zanzibar,” *Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies*

1(1), pp. 135–149.

———. 2010. “Ritual Activities of Tariqas in Zanzibar,” *African Study Monographs* 41, pp. 91–100.

———. 2012. “New Traditional Medicine on the East African Coast: The Practice of Prophetic Medicine in Zanzibar,” 『日本中東学会年報』 28(2), pp. 1–25.

(齋藤 剛 神戸大学大学院国際文化学研究科教授)

---

小杉泰・黒田賢治・二ツ山達郎 (編) 『大学生・社会人のためのイスラーム講座』 ナカニシヤ出版 2018年  
vi+276頁

現代イスラーム思想を中心に幅広く研究活動を展開してきた小杉泰、現代イラン地域研究を専門とする黒田賢治、イスラーム圏の宗教人類学を専門とする二ツ山達郎を編者とする本書は、一見したところ、よくあるタイプの共著の概説書に映る。しかし、「入門書と専門書の間にあるような、幅広いトピックを扱いつつ現代のイスラームについて大学生や社会人が教養として学べるような書籍」(270頁)を目指すという本書の狙いは、巷に溢れる概説書とは似て非なるものであり、ありそうでなかったコンセプトだと言えるだろう。編者らのこの目論見の成否については後述するとして、まずは本書の構成(括弧内は各章の執筆者)を示し、次に各章の内容を簡単に紹介する。

- 第1章 イスラームの学び方——今日の世界を歩く (小杉(泰)・黒田・二ツ山)
  - 第2章 日本とイスラーム——モスクから見る日本のムスリム・コミュニティ (岡井宏文)
  - 第3章 イスラーム復興——西洋モデルに依存しないイスラーム的近代の試み (相島葉月)
  - 第4章 ムスリムにとってのイスラーム史 (清水和裕)
  - 第5章 聖典クルアーン——声に出して誦まれるもの (小杉麻李亜)
  - 第6章 法学・神学 (ハシャン・アンマール)
  - 第7章 スーフイズム・タリーカ・聖者信仰——イスラームの内的理解を深める思想と実践 (二ツ山)
  - 第8章 イスラームと芸術——「音楽」という視点から (米山知子)
  - 第9章 イスラーム金融 (長岡慎介)
  - 第10章 ハラルな飲食物とハラル認証 (阿良田麻里子)
  - 第11章 知と権力——イスラームの専門家とは誰なのか? (黒田)
  - 第12章 ジェンダーから考えるイスラーム——女性にとっての「良い・悪い」の議論を超えて (鳥山純子)
  - 第13章 イスラーム主義 (小杉(泰))
  - 第14章 世俗主義とイスラーム (谷憲一)
  - 第15章 多文化主義とイスラーム (椿原敦子)
- あとがき

第1章ではまず、本書が、日本社会に蔓延する「誤解と偏見を是正しつつ、より深くイスラームを理解することを目的として、若手研究者を中心に作成された」ものであり、「現代的な変化に注目したイスラームの概説書であり、大学生や社会人の教養としてイスラームを学ぶことを目的としている」(3頁)ことが示される。その後はイスラーム史とイスラーム教の基本教義が概略され、特定の立場のムスリムにとっては「逸脱」であっても当事者にはイスラーム的に妥当な「伝統」であり得ることが指摘され、地域、時代などに由来する多様性への目配りが強調される。第1章は後続の全章にとっての導入であると同時に、本書全体に通底する指針を示している。

第2章は、主に1990年代以降の日本におけるムスリム・コミュニティを主題とする。本章での推計によれば、日本のムスリム人口はおおよそ14–15万人(2015年時点、日本人ムスリムはおおよそ2–3万人)であり、1990年代以降増加したモスクがコミュニティセンターとして機能しているという。本章執筆者であり日本